

ひまわりからの メッセージ

49号

2015.4.13

西濃園域
発達障がい支援の
ひまわり

発行人：中野たみ子

子どもたちの

未来のために

今、できることは？



先日、チベット仏教の法王で、インドに亡命中のダライラマ十四世が岐阜を訪れたことを新聞で知り、数年前にチベットを旅したことを思い起こしました。

動乱の前年でしたから、チベットは平穏で、十四世の生家の周りは静かな田園風景が広がり、菜の花が咲きみだれ、緑と黄の鮮やかなコントラストに目を奪われました。生家を守るダライラマの甥は、親切に家中を案内して下さったのですが、あの動乱の後、どうなっているのでしょうか。もはや、この世の人ではないのかもしれない。ません。

チベット仏教の中心でもあり、政治の中心でもあったラサ市のポタラ宮では、なかなか入場が許されず、一日待つて、ようやく中に入りました。そして、順に並んで祈りを捧げる人群れの中で、ラマ僧が何故か私の頭に手を置き、しばし祈ってくださいました。

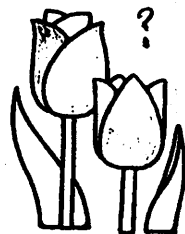
そんな旅の日々を思い出しながら、今、あちこちで起きているテロや民族間の対立、IS国の脅威など、世界規模の戦争へと向かっていく足音が聞こえてくるような気がしています。

日本の子どもたちは、一見豊かな生活を送っているように見え、この平和がずっと続いていくように思っていることでしょうか。けれども貧富の差は次第に大きくなっていくでしょう。文化的な生活の中で私たちが失っていくものも大きいように思います。

人が生きるとはどういうことなのか。子どもたちに安全なレールの上を歩いていくことを教えていくのか、子どもたち自身に考える力をつけていくのか。子どもたちの未来は、大人の私たちの生き方や考え方によって大きく変わっていくのではないのでしょうか……。自問自答の日々です。

見直してみましよう。

我が子の困り感は何？



平成二十七年度がスタートしました。

私は、二十六年度の活動報告を四月十日に、県の障害福祉課に提出し、やっと、新年度のスタートをキリました。

お子さんたちは、新しい環境、新しい担任の先生に出会って、緊張の日々でしょうし、お母さん方も、お子さんを見守りつつ、少し心配をなさっているのではないだろうか。

先月号には、乳幼児期からの見直しについて述べましたが、私たちは家族ではありませんから、お子さんのある年令の部分しか実際にかかわっていくことができません。児童発達支援事業所（大垣ひまわり、神戸たんぽぽ、宍戸あすなろの園、大野なないろ、輪之内さう、養老ことの教室、池田ことの教室、揖斐川アツプル、垂井いずみの園、関ヶ原すきのこ園、海津オーロラ、ヤギン、ゆり、まつぼっくり園など）は、各市町に一ヶ所は必ず

ありますが、殆どは、学齢前のお子さんの発達支援をする所です。

幼児期に、保護者の方が誤った理解をされないことが、まず大事です。「私はどうしてこころへ通わなくてはならないのか、わかりません。保育園の担任の先生に勧められて相談に来たり、「通った方がいい」と言われたので通っています。」とおっしゃったお母さんがいらっしやいましたが、それでは、お子さんを育てていくための助けや支援は、お母さんの心の中に何も入っていないでしょう。

「ことはが遅いだけなんです。」ということはもお母さんからはよく聞きますが、「ことはが遅いだけ」の理由で見童発達支援事業所を勧められることは余りありません。実は、「ことはが遅い」ことの背景にある原因や要因について、意図的なのかかわりが大切だから勧められるのだと考えた下さるといいでしょう。

過度に心配しすぎる必要はありませんが、自分のお子さんの良いところと同時に苦手なところ、その苦手を引き起こしている要因を知っておくことは、きっと今後の子育ての役に立っていくと思います。

わかりにくい子ども達

〜コミュニケーションに困る子〜



今回は、コミュニケーションで困っている子や困っている人のことを考えてみましょう。

私たちは、人とやりとりする時に、ほとんど無意識に対人関係を読みとる力を使っています。相手の気持ちや何をなく察することができると、自分の言動が相手にどう受け止められるかも見当がつかず、ところが、一人で何かを熱中している時はいいのだけれど、集団の中に入るとやたらに仕切りたがったり、相手のことはもうまく受け止められず一方的にしゃべったり、常識的なことにならなかったり、大人になっても、そういう人はいますね。子ども時代には、日常生活でこぼさず字義通りに受け取ってしまったり、友だちとトラブルをおこしてしまうということも多いと考えられます。

以前、「心の理論」について書きましたが、実は心の理論テストも通過しているけれども、日常生活で示す対

人関係の困難な子どもは多くいます。そこでいくつかの物語を考察して研究を進めている人がいます。フランシス・ハッペという人で、「嘘」「方便の嘘」「冗談」「見た」「誤解」「説得」「見かけと現実」「比喩的言い回し」「皮肉」「失念」「二重のたまし」「反対の感情」の十二の物語で、登場人物が字義通りでない発言をした場合、何故そう言ったのかを説明する試みです。

例えば、「方便の嘘」で「ヘレンがクリスマスに欲しいと思っていたプレゼントはうなぎだったので、当然欲しかった物が包みの中に入っていると違って開けたところ、百科辞典が入っていました。それはヘレンが欲しかった物ではありませんでした。」「気に入った」と両親に聞かれて「すてき、私が欲しかったものよ」とヘレンは答えました。「心の理論テストを通過したKくんは「ヘレンが言ったことは本当ですか?」とたずねると、「本当」と退座に答え、「何故ヘレンは両親に対してそう言ったのでしよう?」の質問に対しては、「その百科辞典にはうなぎのことがきくと書いてあったんだ」と答えたそうです。つまり、K君には、ヘレンが両親をがっかりさせまいと思

って方便の嘘を言ったことが理解できなかったのです。
言語学の一分野である「語用論」という分野に苦
手のある子どもたちは、会話をする話し手と聞き
手の間で互いの意図をくみとって説明することがむづ
かしいと言われています。相手のことを聞いて、その
背景にある意図をとらえるのが難しいのです。

例えば、ひまわり学園にお客様がみえて、「今日は
寒いですね」と言われた時「そうですね、寒いですね
と答えるだけなのか、少しエアコンの温度を上げましょ
うか？」と答えるのかと、考えてみると、いかもれません。
相手が社交辞令で言っているのか、そのことばの背景に
意図があるのか、退座に判断することが求められるの
が会話のむづかしいところなのです。

昔のことになりますが、職場実習でスーパーの果物
コーナーに配属されたHさんが「りんごをきちんと
並べておくように」と指示され、お客さんが買おうと
するとせっかくきれいに並べてあった配置がくずれて
しまうために、おっとそのコーナーから離れられず、
結局はクレームになってしまったこともありました。

また、Aさんは「学校でちうともほめてもらえない」と
言うのですが、先生方は、ほめているのと言われます。
「他の子とは、気がきが違うね」と言われたAさんは
「だってほめてもらってないもん」と言い張ります。先生
が「他の子とは気が違った所がちがって、とても良かっ
たよ」と言ってお下されば、ほめてもらったと分かったこと
でしょうが、先生のことばの裏はわからなかったのです。
同じように冗談や比喩、皮肉などが伝わりにくいのも
コミュニケーションの苦手な子どもたちの特性です。

お母さんに叱られ、「もう、家から出ていきなさい」と
と言われて、家を出て行こうとした子や「ここから飛
び下りたら許してやる」と言われて、本当に二階から
飛び下りようとした子もいました。こういう苦手ながい
じめにつながってしまふことも多いので、私たちは、こと
ばの使い方に十分な注意をはらっていく必要があると
思います。

誤解も生まれます。ごっこ遊びで戦いごっこなどをして
いると、「やられたあー」「死んだー」などというこぼ
れがとび交い、「つもりが理解できないと、死んだというこ

とばに反応して腹を立て、叩いたりけうたりするといふようなことも起きてきます。Bくんは、「死んだ」と言われたことに腹を立てたのですが、言った方のCくんは、何故Bくんがそんなに怒って自分を叩いたりけうたりしてくるのかわからないわけです。そんな時に一方的に叩いたBくんが悪いと決めつけてしまうのではなく、CくんはBくんのことを分かちあうこと、そういうことは傷つく友だちがいることも理解し合えることが大切だと思えます。

それから、間接的発話といわれるものも、理解しにくいことばの一つです。先生方も家庭でも、少しやわらかい言い方だからと考えて、「この答、合ってる？」とたずねることがありますね。本当は間違っているのに、「合ってる」という答が返ってきます。すると、どうしても「合っていないのでは？、違うのでは？」と怒りたくなってしまういます。最初の「合ってる？」の意図は、「ほら、よく見てごらん下さい、まちがってるでしょ？」という事です。そんなことは、相手の意図をはかりづらい子には通じないのです。最後に腹をたてて叩いてしまうく

らいなら、最初から間違いを知りせた方が上手いくのかもしれませんが。

比喩については、漫才のこたま、ひびきさんがネタにしています。『くするには骨が折れる』とか、『足が棒になった』とか、一つ一つの意味を覚えてしまえば理解できることであっても、確かにイメージしにくいですね。こたまや状況を子どもたちに理解させるために、別のことばで言いかえてみることもありますが、私たちの言い方次第で逆に子どもたちを混乱させてしまうこともあることを心にためておく必要がありそうです。

文脈を考慮せず同音異義語でまちがえることも多くあります。舌を下とまちがえて解釈し、「下ではなく上です。」と言ってみたり、「牛や馬を牧場で飼うんだね。」と言われて、「買わない、売らない」と答えるなどといったこともあります。ウエクスラーの検査でも「胃は……」と聞いているのに「右」とうえてしまいう子もいます。まるで幼い子が「かざぐるままって車のこと？」と聞いたり、「バス停があるなうトラック停もあるの？」などと疑問に思うようなことが小学生

になっても不思議に思っていたりもするのです。

又、話す相手によってどの様なことばを使うべきであるのか、友だちや目下の子に使うことばと目上の人に使うことばを考えて使うことができるかどうかということも、コミュニケーションにとって大切なことです。誰に対しても敬語を使うので、他の友だちの中で浮いてしまうこともあります。

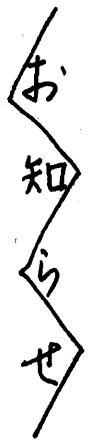
対象となるのが人か物かによって、ことばを選んでは使えるかどうか、心配なところですが、「車かけがをして……」「友だちが足を故障して……」など、人と物とでは使うことばがちがうことも理解できるようにしていくことも、大事なことです。

今回、書いてきた子どもたちの姿は、現実にはなかなか理解してもらえないことが多いと思います。変わった子、変な子、分かりずらい子などと思われ、てしまうかもしれせん。でも、色々な場面で状況を正しく判断して、相手の意図をくみとっていくのが苦手な子(人)がいるということも、まず理解していきなさいものです。

コミュニケーションの苦手さに対して、ソーシャルスキルトレーニングなどが行われていますが、机上の学習だけでは、やはり難しいようぞ、頭では理解できても、実際の場になるとうまく使えないということも多々あるのです。子どもたちはロールプレイなども利用して学んでいきますが、支援する私たちは、相手が発言などの様に理解したのかをまず推測してみることに、その上で相手が理解しやすいようにことばを選んで補足説明をしていくのです。

時には、余りにも理屈っぽく反論してくるので困ってしまふこともあるかもしれませんが、それも又、その子(人)の特性であることと知って、理解者の一人として支援していきなさいものです。

さあ、新年度、学校訪問が今年はこの位でしょうか。子どもたちが困っていることが少ないといいなあと願っています。



五月例会は、十一日、六月は十五日(第三)です。